

仏教はセクシュアル・マイノリティ差別とどう向き合うか  
—クィア仏教学の必要性について—

筑紫女学園大学 宇治和貴〔九州龍谷〕

2016 年 10 月に浄土真宗総合研究所所長丘山願海は築地本願寺で男性同士の婚姻儀礼を執行するに先立ち宗門の機関紙『宗報』9月号で「性的少数者の「儀礼としての結婚式」に関して」と題した文章において、「教理的には問題ない」という見解を示す一方で、「性的少数者の「結婚」「結婚式」の妥当性という課題を設定する以前に、この課題の根本には性的少数者への差別、偏見を克服するということが宗門内外の課題であることを認識すべきであろう」と述べている。この指摘でも確認されるように、仏教教団内に性的少数者への差別や偏見があることは事実である。本研究は、性的少数者への差別を抱える仏教教団において、差別を解消するためにはどのような取り組みが必要なのかを、クィア仏教学の視点から検討するものである。

「クィア」理論は、性的少数者への差別を克服するための論理として構築されたものであり、異性愛規範に対する批判と抵抗を共通項として持つ。このクィア理論に対する仏教学的応答がクィア仏教学である。それは、異性愛を前提とし、性的少数者当事者をクィアとして位置づける差別的な価値観に疑問を抱かない仏教者や仏教教団を問題化し、それを支える教団の教理や教学が、歴史状況における価値観の制約下で人為的に成立したものと知見から問い直し、再構築する実践的な仏教学を意味する。こうした知見から既に筆者は、クィア仏教学における課題を①現実の仏教教団内に内在する性的少数者差別問題の発見、②本質的な「平等」を求めるための教学の再構築の二つだと指摘した。

冒頭にあげたように、仏教教団内に性的少数者の差別が存在することは、徐々に認知されつつある。しかし、「教理的には問題ない」にもかかわらず、なぜ教団内に差別や偏見があるのか。

この課題を考えるにあたり、クィア理論において寛容が迫害や差別と同様の抑圧をもたらすという視点は重要になる。絶対的存在である仏を示し、仏は平等にすべてのいのちを救うと説いても、現実の差別は解消されない。むしろ、現実の差別状況を差別だと認識させ得なかった教理・教学への批判がクィア仏教学からは提示される。なぜなら、教団の骨格は教理・教学だからである。よって、クィア仏教学の視点からは、差別状況を見逃さない主体を成立させる極めて主体的な教学の構築が求められることになる。

本研究では、差別状況を克服するための視点として、親鸞が当時被差別の対象として扱われていた「れふし・あき人・さまざまのもの」と同じ立場に自らを置いた「われら」の宣言に注目したい。この宣言は親鸞が仏教者として、自らの尊厳性を自覚し「われら」を「下類」と蔑む価値観から解放され、等しく尊厳性を持つものとして連帯したことを示すものであった。この宣言の歴史的意義を解明することによって、実践的で主体的な仏教教学の在り方の一つを提示することで、クィア仏教学の必要性を確認したい。

キーワード : クィア仏教学 セクシュアル・マイノリティ差別 実践